

# F A K E A N D R E A L

このストーリーはフィクションです。実際の人物や団体とは関係ありません。

カーチェイスの描写が含まれますが、現実で行うと重大な事故に繋がる恐れがあり、

非常に危険です。決して真似しないでください。

ONOMITISORA SINCE2024 THIRD TIME SCHOOLFESTIVAL EXHIBIT

第一速 謎のヒッチハイカー

第二速 二人でドライブ

第三速 潜入調査開始

第四速 複雑な心境

第五速 自動運転車VSSKYLINE

第六速 限界すれすれのダウンヒル

## 第一速 謎のヒッチハイカー

夜の道をV36SKYLINEクーペが駆（はし）っている。運転しているのは二戸空太（にとこうた）ガソリンスタンドの店員である。仕事を終えた彼は家に帰るため、夜の道を駆（はし）っていた。そんな彼の目にホワイトボードを掲げて立っている女性が目に入る。今時ヒッチハイクなんて珍しいな。そう思いながら車を停めた。「どこまで？」と尋ねると、「とりあえずどこか遠くまで。」と言った。どこか遠くとはどういうことか不思議に思いながらも車を出した。すると後ろから猛烈な勢いで車が迫ってきた。「危ない奴だな。先に行かせるか。」と二戸が言う。だが、「その車に追いつかれないで。」と言われた。「この車とどういう関係だ？」と尋ねると、「会社のデータを盗まれて、その証拠を掴んだら、その車に追われて。」と返って来る。「よく分からないけど、振り切れば良いんだな。」二戸はアクセルを踏み込み車を急加速させた。しつこく迫って来る相手の車、「相手のドライバーもやり手だな。普通の神経ならここまでコーナーで突っ込むことは出来ない。」そう二戸が言いながらバックミラーを覗く。だが、ドライバーが居ないのだ。どういう事だ？驚く二戸。すると、「その車AIが運転してる自動運転車なの。」と言われた。困惑する二戸。だが、彼に迷いはない。「ここからは俺が駆り込んだコース、AI相手でも何でも着いてくれるもんなら付いて来い！」そう言ってコーナーに突入した。自動運転車がコーナー手前で速度を落とす。しかし、二戸は減速しない。ギリギリまでブレーキを遅らせる。そしてそのまま勢いを使つてコーナーをドリフトで駆け抜けた。そのまま自動運転車を振りきった二戸はボロボロの廃業したガソリスタンドに入った。車を停めると、「よくわかんないけど、とりあえず今日

は泊まりなよ。二階部分好きに使って良いから。」そう言って鍵を差し出した。A Iに追われるって一体どういうことなんだろうか？二戸は疑問に思った。一方、ヒッチハイクの女性  
は、このガソリンスタンド跡地は一体何なんだろうか？と疑問に思った。

翌朝、二戸が仕事に向かうため車に乗ろうとした時、「昨日はありがとうございました。」と声がした。振り向くと昨日のヒッチハイクの女性が立っている。「いや、別に良いよ。なんか困ってるみたいだし、しばらくここにいたら？」と言った。「ありがとうございます。ところでお名前伺ってなかったなど。」と言われ「二戸空太です。」と言った。「私は、新家直緒（にいえなお）です。」とその女性は言った。「とりあえず、仕事行ってくるから、今日は夜には帰って来るから。」と二戸は言い、車に乗った。

## 第二速 二人でドライブ

仕事に向かう二戸、カーラジオでニュースが流れる。リフォームの会社から個人情報漏洩したそうだ。また、ディープフェイクと言ってAIが本物になりすました映像を流して個人情報盗むなどの手口があるそうだ。「全く、物騒な世の中だな。」二戸は呟く。そうこうしているうちにガソリンスタンドに着いた。仕事をしながら二戸は国道を昨日の車と同じような車が駆っている事に気付く。一体あの車の正体は何なのか？謎は深まるばかりである。

仕事を終え帰宅した二戸、するとボロボロだったスタンドが綺麗になり、何故か間接照明まで着いている。「なんだこれは!？」と驚く二戸、すると、新家が「ボロボロだったから少し改修してみました。」と言った。「そんな事出来るんだ。」と二戸は驚くばかりだ。「あ、そう言えば、明日シフト入ってないから良かったらどこか行く？」と二戸が言った。「是非。」新家が返す。「さて、どこに行くかな。」二戸はスマホで調べていた。

翌朝、二人を乗せたSKYLINEはショッピングモールに向かっていた。信号待ちをしている最中に二戸が軽く空ぶかしをしていた。「まだ赤信号ですけど？」新家が言う。「軽くエンジンの回転数を上げておくと信号が変わったときすぐに発進出来るから。」二戸が返す。信号が変わり、スムーズに発進、そこから素早くギアを入れ替える。手慣れた操作である。

「ずっと気になってたんですけど、ガチャガチャやってるレバーみたいなものって何ですか？」新家が尋ねた。「これは、シフトレバーって言って、これでギア変えてるんだ。最近では自動でギアを変えてくれる車が多いけど、手動で変えるマニュアル車に慣れててね。確か

にオートマはスムーズだけど、慣れてしまえばマニュアルの方が速いからな。」二戸が言った。ショッピングモールに着き、車を停めると二人は中に入ってしまった。

夜になった。「帰る前に星でも見に行くか。」二戸は夜の山道にハンドルを切る。ここでも素早くシフトレバーを操作して的確にギアを選んでいく。頂上に着くと、車の電子キーを使って天窓を開けた。「ここ結構綺麗でしょ。」二戸が言う。「はい。」新家が返す。だが彼女の表情は曇っていた。「出来れば、家族にも見せてあげたかったな。」そう呟いた。「家族は何してる人なの？」二戸が尋ねた。「リフォームの会社運営してたけど、相手先の企業の人になりすましたAIからビデオ通話がかかってきて、その時に個人情報が漏れるディープフエイクの詐欺に引っ掛かって。その証拠を履歴から調べたのがAIにばれたみたいで会社が襲われた。それで今どこに居るのか分からなくなってしまってる。」新家が言った。「そんなことが。」二戸が返す。何とかして新家の親を見つけない。そう思った。

### 第三速 潜入調査開始

帰り道で新家は二戸の家族の事について尋ねた。すると、「親が早くに亡くなったんだ。それで経営してたスタンド継いだけど倒産して、大手のスタンドの看板借りて系列店として営業してたから、おなじ系列店の別の店舗で働いてるってところだ。」と言った。「あのスタンドは親御さんがやってたスタンドなの？」新家が尋ねる。「ああ。」二戸が返した。SKYLINEの四灯のヘッドライトが夜道を照らしていた。

翌朝、仕事に向かうために車に乗ろうとした二戸。すると、「空太、行つてらっしゃい。」と声がする。空太？急な下の名前呼びに戸惑いながら振り向くと新家が手を振っている。

「行ってくるよ直緒。」と二戸も返す。仕事に向かう車の中で二戸は少し困惑していた。

仕事中、やはり今日も新家を追っている車が駆っている。「いつもこの時間か。明日は早上がりのシフトだから仕事終わりに後を付けてみるか。」二戸が呟く。と、お客さんが入って来た。「あ、いらっしゃいませ。」仕事中であることを忘れていた二戸は慌てて車の誘導に向かった。「すいません、ドラレコ取り付けて欲しいんですがいけますか？」お客さんが尋ねる。「はい、大丈夫ですよ。」二戸が答える。ピットに車を入れ、作業に取りかかった。

仕事が終わわり、帰宅する。少し恥ずかしいが新家を下の名前で読んでみることに。「な、なお、ただいま。」言ってしまったことで恥ずかしさが倍増する。「お帰り、空太。」直緒が笑顔で答えた。

翌日、仕事を早上がり、例の車が来るのを待ち伏せする空太、後ろを付けていくと大きな会社にとどり着いた。表向きはコンピューター会社のような。この会社の内部情報を得るに

はどうすれば良いか？空太は頭を回す。ふとドライブレコーダーが目につく。ドラレコの会社の社員になりすまして提携結べるように商談を仕掛けるか。空太は潜入作戦を立てる事にした。

スーツを買い、翌週のシフトが入ってない日にアポを取る。その日が来た。会社の応接間に通された。「御社の技術は素晴らしい物であり、是非我が社と提携していただき、より我が社製品の品質を高めたいと思っております。」ドライブレコーダーの会社の社員になりました空太、冷や汗をかきながら商談をする。何とか商談が成立した。こうして潜入捜査が始まった。

#### 第四速 複雑な心境

ガソリンスタンドの監視室、空太は考え事をしていた。あの会社、クリーンな会社に見えるけど。とはいえ、直緒を追ってきたのもあの会社に入入りしている車。一ヶ月経ってもいいまいち情報はつかめていないな。そんなことを考えていると、給油レーンを監視しているモニターから音がする。モニターを確認した空は給油許可のボタンを押した。休憩時間、スマホを見ると、例の会社から連絡が。どうやらまた納品依頼である。ドライブレコーダー会社の社員にうまくなりすましているようだ。次の休みに再び行く事にした。最近やけに納品の依頼が多い。コンピューター会社が一体何にドライブレコーダーを使うのだろうか？空太は疑問に思った。

休みの日、その会社にやって来た空太、「失礼かも知れませんが、ドライブレコーダーの使用用途についてお教えいただけませんか？」社長に思い切って聞いてみた。社長は一瞬顔を曇らせたが、「くれぐれも外部に漏らさないようにな。」と言い、パソコンを開いた。「私はね、ハッカーなんだよ。」驚きの発言に息を飲む空太、社長は続けて、「会社のSNSなどから取引相手の情報を入手して、本物に似たアバターを作り、個人情報を入力している。この前新家リフォームと言う会社をハッキングした時にしつぽを掴まれてな。何とか社長夫婦を捕まえたが、娘に逃げられた。そこで私が作ったコンピューターシステムを搭載した車で追跡させ、居場所を掴んだ。その娘を監視するために君の会社のドライブレコーダーのカメラを使いたい。」と言った。ふぎけるな。喉まで上がった言葉を押し殺す空太、ここで感

情的になってはいけない。証拠となるデータと、彼女の親の居場所を掴まなければ潜入した意味が無い。「この件、私に任せてもらえませんか？我が社の製品は一番私が理解しておりますので。」空太が言った。「良いだろう。」社長が言う。直緒を悲しませるようなことはしたくない。だがこうするしかない。空太の心は複雑だった。

帰宅した空太、給油レーンの壊れたカメラを外し、正常に映像を撮れるドライブレコーダーを取り付ける。「何してるの？」直緒が話しかけた。「、、実はAI側の味方だったんだ。」空が返す。「どういうこと？」直緒が尋ねる。「君のこと監視するように頼まれてな。」空太が言う。「そんな、信じてたのに。」直緒の言葉が胸に刺さる。「人の視線は気にしない主義なんで。」と言い放つ。監視室にあったパソコンを持ち出し、スタンド跡地を後にした。少し離れた場所で車を停めた空、「ごめんな、本当はこんなことしたくないけど。」と呟く。

夜空にSKYLINEのアイドリング音が響いていた。

## 第五速 自動運転車VSSKYLINE

夜のコンピューター会社、空太は直緒の会社をハッキングした証拠映像を盗んでいた。さらに、直緒の監視データを転送するので、会社の監視システムにログインできるようにしたいと言い、彼女の親の監視データも見れるようにした。そして彼女の親の位置情報を掴んだ。その時、監視データに動きが。本来スタンド跡地にいるはずの直緒だが、なぜか別の場所に動いていた。「何やってるのかな？」後ろから声がする。驚いて振り向くと社長が立っていた。証拠を掴んだUSBを握って逃げる空太、しかし下の階から社長が開発したAIが追って来て屋上に追い込まれた。「君を信用して打ち明けたんだがね、裏切りはやめてくれよ。」社長が言う。「裏切り？勘違いしないでくれ、最初からあんたと組んだ覚えはない。」空太が言う。「貴様！」社長が空の胸ぐらを掴む。「悪いけど、人の目線は気にしない主義なんです。」空が返した。「だが、君の逃げ道はないぞ。」社長が言う。「それはどうかな？」空太が電子キーを押す。すると、地上に停まって居る車の鍵が開き、天窓が開いた。「言っておくが、新家リフォームの娘と親の居場所までには多くのトラップを仕掛けておいた。たどり着く事は不可能だ。」社長が言う。「その言葉、駆りで勝ってから言って貰おうか。俺にしてみればゴチャゴチャ言っている暇があったらアクセル踏み抜く。ただそれだけの単純なことさ。」と言い残り屋上から飛び降りる。SKYLINEの四灯のヘッドライトが夜の闇に光る。アクセルを床まで踏み込みクラッチを蹴っ飛ばす。ロケットスタートをかまして急発進した。そこから素早く二速に切り替え、エンジン回転数を上げる。そして一気に四速へ。的確なシ

フトワークで後ろから追ってくる車を振り切った。すると交差点から大型トラックが突っ込んできた。空太は素早くサイドブレーキを引き、百八十度回転しながらトラックをかわす。そのまま更に百八十度回転し、進行方向に向き直り、再び駆り出した。直緒の元へたどり着く。「ハッキングの情報を掴むために潜入調査していたんだ。親御さんの居場所も掴んだ。迎えに行こう。」と言って直緒を乗せ駆り出した。

直緒の親の元へ向かう最中、今度はバリケードが行く手を阻む。だが空に止まるという選択肢はない。バリケードの横の茂みに突っ込み迂回を試みる。オフロードではタイヤの接地が悪くなる。車を振り回しドリフトを決めながら茂みを駆け抜けた。直緒の親の元にたどり着く。親も乗せた空は新家リフォームの会社を目指すことに。だが、その道にはもう一つのトラップが待っていた。

## 第六速 限界すれすれのダウンヒル

アクセル全開で駆け抜ける空太、四人乗っていると登り区間では大幅に失速する。すると、前に自動運転車が表れた。センターラインをまたぐように駆り、行く手を阻む。だが、空は「そんな所に走行ラインはない。俺の走行ラインは縁石上だ。」といい、左の車輪を縁石に乗り上げながら追い越した。そして、ドリフトで自動運転車をブロックし、崖すれすれに追いついた。「見たところ自動運転車はFFだな。」空太は言う。「FFって？」直緒の問いかけに、「フロントエンジンフロントドライブの略、要するに前輪駆動車だ。そしてこっちはFR、フロントエンジンリアドライブ、後輪駆動だ。車を横に向けて駆らすなら、後輪に駆動輪を持つこっちの方が有利だ。」空太はコーナーでドリフトをする。コーナーワークで勝負に出た。何とか差が開いたが、追いついてくる。「定員乗車だときつい。」空太が言う。しかし、空太は打開策を思いつく。この重い状態で下り区間で加速して、スピードにのせる。そして限界直前までブレーキを使わず、勢いを利用してコーナーを曲がる。行けるか？いや、行くしかない。覚悟を決めた。下り坂に差し掛かる。加速チェンジをして勢いよく下っていく。コーナー直前でブレーキ、ガードレールすれすれをかすめながら曲がりきった。バックミラーから自動運転車が消える。振り切ったようだ。新家リフォームの会社に着いた空太は、USBを手渡し、「これにハッキングした証拠が入っているからこれを使えば事実を明らかに出来る。」と言った。三人を降ろした空は新家リフォームの会社を後にした。バックミラー

には直緒が家族との再会を喜んでいる姿が映る。それを見て空太は微笑んだ。

数日後、スタンド跡地には、SKYLINEを修理する空太がいた。カーチェイスで壊れた部分を修理していた。「ふうやっと直った。」空が言う。その時、ピットで流れているラジオのニュースで新家リフォームの会社のハッキング事件が解決したと流れてきた。「やったな。」相棒であるSKYLINEに笑顔で言う。「そう言えば、直緒は元気にしてるのかな?」ぼそっと呟いた。潜入調査中、彼女に冷たく当たってしまった事を気にして距離を置いていたのだ。「まあ、今更仲良く出来るわけもないか。」少し寂しそうに言った。

その日の夜、スタンド跡地に車が入ってくる。こんな所に車が入ってくるはずが無いのだが。首をかしげながら車に近づくと、乗っていたのは直緒とその家族だった。「どうしてここに?」空が尋ねると、「お礼を言おうと思ってね。ありがとね。」直緒が言う。「別に良いよ。冷たくしてごめんな。」空が言う。「気にしてないよ。あの時は潜入してると思わなくて強く当たっちゃっただけ。」直緒が言った。「そう言えば、家族と一緒に星見に行く約束してたな。今から行くか。」そう言い、修理が終わったSKYLINEに四人が乗り込み、星の絶景スポットに向かった。星空を眺める二人をヘッドライトが照らしていた。